

- ★ 海環境の再生に向けた市民団体の取組み 海に森をつくろうよ!...1・2
- ★ 県立海洋科学高校の藻場再生への取組み.....2
- ★ サザエ・カサゴ・アワビの種苗放流を実施しました.....3
- ★ 『荒崎海岸クリーンフェスタ2022秋』開催3
- ★ あの海の幸が絶滅危惧種に指定!三浦半島のアワビの現状4
- ★ 水中ドローン操作研修で藻場と漁礁の状況を調査しました...4

一般財団法人 横須賀西部水産振興事業団
〒240-0101 横須賀市長坂2-2-2 ☎046-857-6596
URL <https://www.yokosuka-seibusuisan.org>

「西部水産振興だより」のバックナンバーや「小田和湾の藻場環境」のパンフレットがダウンロードできます。ぜひご覧ください!



海環境の再生に向けた市民団体の取組み

～海に森をつくろうよ! PROJECT～

よこすか海の市民会議・よこすか海遊クラブの活動紹介

よこすか海の市民会議は、横須賀市の港湾計画改定にあたり2003年に設立した市民団体です。「海の観察会」【写真1】「貝殻アート体験」「わかめの養殖体験」【写真2】といった実際に海に触れる・体験することで、身近な海の世界を考えるきっかけ作りをすることが、私たちの活動の中心となっています。子どもたちにも親しみやすいように、これらの体験活動は「よこすか海遊クラブ」という名前でを行っています。

海のモニタリングを通して見えてきた「海の砂漠」

私たちスタッフは、実際に海の中に入ってモニタリングを行っています。海の世界の変化が今ひとつ分りにくいのは、海の上からだと海の中の様子が見えにくいということです。

例えば、山や森といった陸の世界の変化に「なら枯れ」があります。この現象は誰が見てもあそこの木が枯れているのではないかと気付くのですが、海の中の様子はなかなか海の上からでは見ることが難しいです。

「磯焼け」という言葉をよく聞くようになったのは7～8年前からです。

三浦市の小網代湾のモニタリングを2012年8月から1年を通して行いました。2020年10月に久しぶりに小網代の海に入りモニタリングを行ったところ、海の中の様子が以前とは全く変わってきており、目の前の海底には豊かにあった海草・海藻がほぼありませんでした。「海の砂漠」を見ているようでした。「これはたいへんなことになっている。何かアクションを起こさないといけない」という危機感を持ちました。

海環境の再生プロジェクト

～海に森をつくろうよ! PROJECT～

15年程前から海のモニタリングを行ってきたフィールドの1つにリサイクルプラザ「アイクル」(浦郷町)の海域があります。【写真3】ここは長浦港の浅瀬(しゅん

せつ) 残土を利活用して、造成浅場の工事が2017年夏から行われ、2018年11月に完了しました。

工事前と後の海の様子を比べられるように国土技術政策総合研究所(国総研/長瀬)、神奈川県栽培漁業協会(城ヶ島)、魚類学者、自然調査会社の協力を得て、高い精度で造成浅場の調査を行ってきました。そして、この造成浅場に海草を移植する実験を行うことになりました。



海環境の再生に向けた市民団体の取組み

～海に森をつくろうよ! PROJECT～

2022年1月、海草のアマモを移植して、海の再生実験第一段『海に森をつくろうよ! PROJECT』の開始です。【写真5・6】海の世界からアドバイスをもらい、アマモのDNAの観点から、同じ東京湾に自生しているアマモで、走水のアマモ場より約200株採取して造成浅場の2つのポイントに移植しました。【写真7・8】

このプロジェクトについて、地元の海洋調査会社(髙マリン・ワーク・ジャパン/追浜東町)に話をしたところ、ドローンによるモニタリングをやってみたらどうかとの提案を受け、2022年2月から1年間で4回の空中ドローンと水中ドローンによるモニタリングを行ってきました。【写真11】

2022年7月にはボランティアスタッフを募り、走水のコアアモの移植実験を行いました。【写真9】

このころから、この造成浅場にはアマモ、コアアモの自然発生群が現れてきました。【写真10】

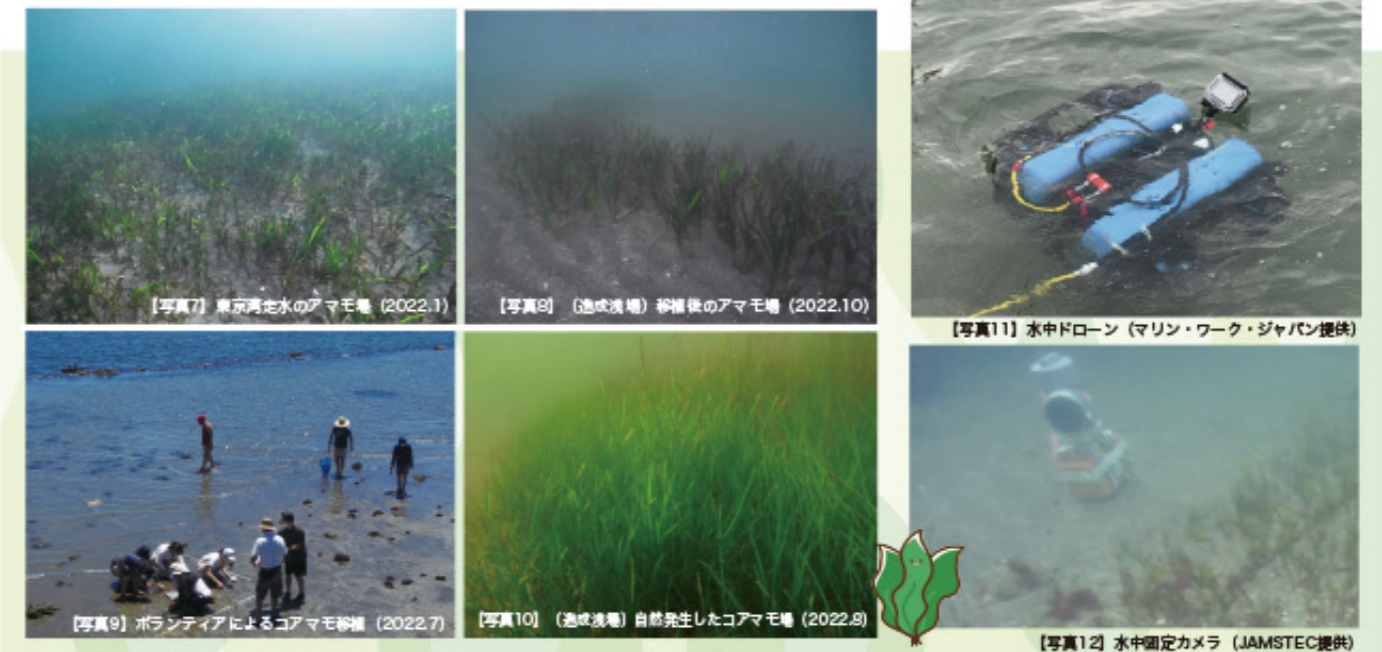
同じく7月に海洋研究開発機構(JAMSTEC/夏島町)にて、水中固定カメラ【写真12】を移植アマモ場の脇に設置してもらい、アマモ場周辺の様子をモニタリングしています。こちらも貴重なデータが得られています。

しかし、ここまで順調に見えていた造成浅場は、本年1月16日水中ドローンと水中固定カメラの映像から、アマモ、コアアモが食害を受けている様子が見られました。

この海域には、クロダイが多く確認されており、また海上には、以前はそれほど多くは見られなかった海鳥「オオバン」が多数確認されるようになりました。有識者から、アマモにネット等を使用して、食害から防御することを考えてはどうかとのアドバイスをもらいました。

この造成浅場が出来上がってから約4年経過しましたが、1年前には見られなかったアカモクが造成浅場の中に出てきています。工事直後には、でこぼこだった海底は砂がきれいな波模様を付けてきて、海底が落ち着いてきたように感じます。少しずつですが、海に森が生まれてきているように感じています。

この造成浅場に海草類が育ち、海の生き物が生まれ、この浅場を通して、少しでも多くの市民が「海っていいね。海の世界を大切にしていこう」と思ってくれることが『海に森をつくろうよ! PROJECT』の活動が目指しているものです。(よこすか海の市民会議 代表 川口将人)



県立海洋科学高校の藻場再生への取組み

令和4年10月28～30日、千葉県にて開催された「全国アマモサミット in たてやま」に参加し、6月に佐島で行ったアマモの植栽報告をしました。北海道大学の仲岡先生より、植栽時に設置した水中タイムラプスカメラ(協力: マリン・ワーク・ジャパン)のデータが大変貴重であることやアマモの病気についてご教授いただきました。また他校より、殺藻細菌や春に植栽したことの発表があり、これらを参考に「藻場再生」に向けて今後も活動していきたいと思っています。

「藻場再生への取組み」は、本紙48号「神奈川県立海洋科学高校～地元水産業との取組み～」でも詳しく紹介しています。(事業団ホームページからご覧いただけます)

令和4年度 下半期の主な事業

当事業団は地域活動の支援、水産振興を事業の柱として、
種苗放流や研修会開催などの事業を行っています。
本年度前半の主な事業活動を紹介します。

サザエ・カサゴ・アワビの種苗放流を実施しました。

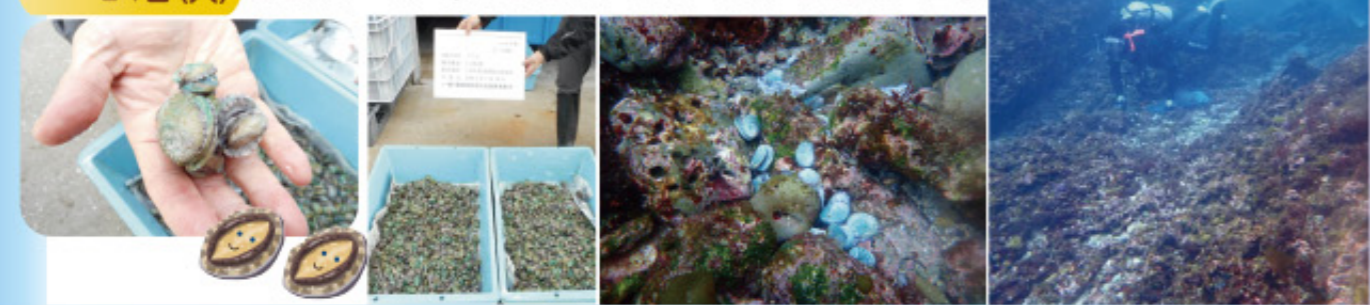
6月21日(火) サザエ(平均殻高20mm) 当事業団12,000個と両漁協
購入分を合わせて、57,000個を長井漁港及び佐島漁港
の沖合に放流しました。



10月11日(火) カサゴ(平均全長60mm) 4,000尾を長井 新宿漁港
岸壁から放流しました。



2月10日(金)・14日(火) アワビ(平均殻長25・30mm) 当事業団2,500個と両漁協購入
分を合わせて、8,500個を長井と秋谷の沖合に放流しました。



トピックス

『荒崎海岸クリーンフェスタ2022秋』 開催

10月9日(日)

『荒崎海岸クリーンフェスタ秋』が6月12日
「2022初夏」に引き続き開催されました。
荒崎海岸なんやの浜の海岸清掃とカサゴ8,000尾を放流しました。
次回は、**令和5年6月上旬の日曜日 9時~**
荒崎海岸なんやの浜 参加無料、
当日現地集合、小雨決行・荒天中止
詳しくは、<http://www.wafa.jp> TEL 045-663-5688



あの海の幸が絶滅危惧種に指定!? —三浦半島のアワビの現状—

三浦半島の沿岸は地形の変化に富んだ岩礁が続き、好漁場となっています。特に、神奈川県内におけるアワビの漁獲量は三浦半島が最も多く、県下随一の産地となっています。

三浦半島で漁獲されるアワビには、クロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビの3種類があります(図1)。一見どれも同じように見えますが、よく見ると殻の形や横から見たときの殻の高さ、裏側の肉の色が異なります。また、生息する場所もそれぞれの種類で異なり、種類ごとに棲み分けをしているようです(図2)。

高級食材として日本の食文化とかかわりが深いアワビですが、国際自然保護連合(IUCN)は昨年12月、世界的に絶滅の危機が増大しているとしてクロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビの3種類を新たに絶滅危惧種に指定しました。三浦半島についてみると、アワビ類(クロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビの合計)の漁獲量は、2000年代前半では8~10トン程度あったものが、最近数年間では1トン前後まで減少しています(図3)。この原因は、アワビを獲る漁師さんが減っていることとありますが、それ以上にアワビ資源そのものが減っているためと考えられます。

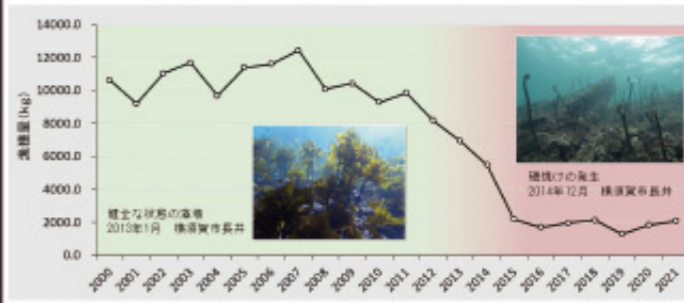
アワビ資源が減少した原因に、沿岸に繁る海藻の森である「藻場」が消失する「磯焼け」の発生があります。アワビは、アラメやカジメといった大型の海藻を餌に育

三浦半島に生息するアワビ3種類



ちます。その餌が無くなってしまったため、アワビが繁殖したり育ったりすることができなくなっていると考えられます。実際、三浦半島のアワビ類の漁獲量は、磯焼けが発生した時期から極端に減少していることがわかります(図3)。

三浦半島各地の沿岸では、アワビ資源を増やすために種苗放流が盛んにおこなわれています。しかし、こうして放流した種苗も、餌となる海藻が無ければ、大きく育って繁殖することができません。アワビを増やすためには、藻場を回復させることが不可欠です。浜の漁師さんをはじめ、多くの関係者が中心となって、積極的に藻場の回復に取り組んでいます。藻場をはじめ、豊かな海の環境を取り戻すことが、アワビの絶滅を回避し、海の幸としておいしくアワビを食べられるようにすることにつながるのです。<神奈川県水産技術センター 芳山 拓>



水中ドローン操作研修で 藻場と漁礁の状況を調査しました

1月31日(火)長井町漁協及び大楠漁協の組合員を対象に水中ドローンの操作研修(藻場調査)を佐島漁港沖合で船上にて実施しました。研修では、磯焼けした藻場とわずかながら残っている藻場、海底に設置した漁礁の状況を確認することができました。

